

巻 頭 言

歴史分科会長 寒川高校 澤野 理

冒頭から私事で恐縮ですが、昨年8月にハンガリーを旅行してきました。1986年の初渡航以来、ヨーロッパ方面に旅行する時は、1回を除いて全てハンガリーを旅程に組み込んでいたのですが、昨年はこの30年間の変化を改めて実感しました。1989年の汎ヨーロッパピクニックの現場は記念公園として整備され、教科書等にも載っている国境の鉄条網フェンスも、一部だけモニュメント的に残されている状態でした。国境にはオーストリアのパトカーが1台、とりあえず停車しているだけ。歩いて国境を越えてオーストリアへ入国する私に声すらも掛けてくれませんでした。ウィーンからブダペシュトへの移動は30年ぶりに鉄道を利用しましたが、所要時間は約2時間も短縮。新幹線が通ったわけでもないのに、なぜここまで速くなったのか。何のことはない、国境での面倒な手続きが全てなくなったからです。イギリスのEU離脱が話題となった昨年ですが、少なくともハンガリー以北の大陸部では、国境の存在感が年ごとに薄れているように感じられます。

さて、私はハンガリーへの初渡航の翌年に神奈川県教員となったのですが、現時点で歴史教育について振り返ると、少なくとも2つの大きな変化が見られたのではないかと思います。1つは、1994年における社会科解体と世界史必修化、もう1つは、正確には現在進行形とするのが正しいのですが、2022年に新科目歴史総合が設置されることです。後者については、科目の内容や学習方法など不確定な部分も多く、高等学校・大学・教科書出版社のそれぞれが今後の動向に注目しているところです。歴史分科会でも、高大連携歴史教育研究会や大阪大学歴史教育研究会など外部の研究団体と連携しつつ、新科目への対応を研究しているところです。その成果は、毎年夏に実施している世界史の高大連携講座や日本史サマーセミナーでも徐々にあらわれているといえましょう。ここから先は昨年度の巻頭言と同じ内容の繰り返しとなりますが、次期学習指導要領で強調されているアクティブラーニング的手法など「新たな授業手法」を研究する際、「グループによる話し合いや発表」といった「形」をなぞるだけでなく、その手法を通じて「何を生徒に伝えるか」ということでしょうか。そして、それを可能とするためには、教師の側に幅広い知識や教養の裏付けが必要であることは論を俟たないところです。そのための研修の場としての社会科部会・歴史分科会の役割は、ますます重要なものとなっていますし、実際、ここ1、2年のうちに新採用の先生をはじめとする若手の先生の参加も増えています。今年もしつこく書きますが、われわれ社会科部会・歴史分科会の各種活動は、現状では数少ない「社会科教師」「歴史教師」としての力量を高めるための場です。社会科や歴史の授業でお困りの時、別に困っているという程ではないが自校以外の教員に話を

聞いて欲しい時、日々の教材探しにお困りの時、ズバリ、指導法に関するアドバイスを聞いてみたい時など、いつでもお声がけください。

時節柄、校務等ご多忙とは存じますが、これを機にひとりでも多くの先生方がわれわれの参加いただけることを祈念することをもって、巻頭言とさせていただきます。今後ともよろしく申し上げます。



汎ヨーロッパピクニック記念公園での筆者。後方の道路の向こうはオーストリアで、ここから1時間ほど歩くとオーストリア側の国境の村にたどり着く。